

親子二代でコンクール入賞

受け継がれる「一事一心」の響き

日本古来の音楽の良さを見直そうと、昭和53年に創部された阿南中学校箏曲部。四半世紀以上にわたり演奏活動を続け、今夏には全国箏曲コンクール25年連続入賞という偉業を成し遂げた。母・美穂さんはその1年目と2年目に在籍、中学3年の美穂さんも二度の入賞に貢献した。

琴に魅せられ、琴で魅せる親子が奏するのは深遠な調べ。その音色に耳を澄ませてみた。

中西 美穂さん（37歳・領家町）

美穂さん（阿南中学校3年）

くと、2年目には日本一の栄冠をつかんだ。「最優秀と聞いた瞬間、飛び上がって喜んだのを覚えています」。まさかの入賞劇に夢のような感動を味わった美穂さん。卒業後も恩師のもとで琴の練習に励んだ。

としても大きく成長した。一つの事に打ち込むことの大切さ、すばらしさをあらためて実感した。

親子二代での入賞は、多くの卒業生を輩出してきた阿南中学校箏曲部でも初めてという。母・美穂さんは、「これだけ長い間、

入賞記録を伸ばせてこられたのも、一重に熱心に指導していただいた先生方のおかげです。」としみじみと語る。

美穂さんは、母のすすめで箏曲部に入部。琴の美しい音色に少しずつ心を奪われていった。入部して間もない頃、指導者で箏演奏家の藤本 玲さん（徳島市在住）の提案で、年に一度、定期演奏会を開くことになった。人前で演奏するのはもちろん初めて。練習にも熱が入り、それまでの楽しむ琴から魅せる琴へと変わっていった。翌年には全国箏曲コンクールにも出場。初舞台でいきなり3位に輝

「私も頑張ろうって思いました。長女・美穂さんもまた、

母のすすめで箏曲部に入部した。「母の時代から続く連続入賞の伝統をしっかりと受け継ぎたい」と、必死の思いで練習に打ち込んだという。その集大成として臨んだ今夏の全国コンクールは3位だった。「すごく悔しかった。でも、伝統を守ってよかったです。」と胸を張った。「つらい時もあったけど、最高の仲間と最後までやり遂げることができたことが一番の思い出です」。

「技術の上達だけでなく、礼節を学び、友達との仲間意識も高めてほしかった」。そんな母の思いを知ってか、プレッシャーとの闘いに打ち勝ち、人

家のリビングの一角に、畳敷きのスペースがある。ここに琴を並べて練習し合ったことがある。二人で最初に弾いた曲は「さくら」。美穂さんの時代のコンクール課題曲「星のように」にも挑戦した。「今は娘の方がレベルが高くて」と、はにかむ美穂さんの後ろには、「一事一心」としたためられた軸が掛けられている。亡き母が愛した言葉だという。「母がなぜ私に琴をすすめたのかを聞いてみたことはありませんが、今は、この言葉がじんわりと心に浸みています。」と、美穂さんは話す。ともに母のすすめで琴の道を歩んだ二人にとって、心の琴線に触れる言葉といえる。「事」を「琴」に置き換えて、相通じる親子が奏するのは深遠な調べ。13本の弦では表現しきれない音色が2人の間では響き合っている。

来春、中学生になる次女・凛花さんも箏曲部に入りたいと話している。深遠な調べにまた一つ、頼もしい音色が増えそうだ。

